

クビアカツヤカミキリ被害防除効果調査

令和2～4年度（執行委任：農林水産部みどり共生推進課）

川島直通

三重県において、特定外来生物クビアカツヤカミキリによる被害が令和元年度にはじめて報告された。既に被害が報告されている他の都府県の状況から、本県においても今後被害が拡大する恐れがある。そこで本事業では、本種の被害拡大の防止に寄与することを目的として、令和元年に被害が確認された被害地において、クビアカツヤカミキリ被害発生のモニタリング調査および被害防除対策の効果検証を実施した。

1. 被害モニタリング調査

クビアカツヤカミキリの防除対策が実施されている被害地において、令和2年度は年4回（5月、6月、7月、9月）、令和3年度は年5回（4月、5月、6月、7月、9月）被害モニタリング調査を実施した。調査項目はクビアカツヤカミキリによるフラス（木くずと糞の混合物）排出孔の有無と数とした。なお、令和2年7月と令和3年5月はフラス排出の有無のみを記録した。また、令和2年5月、9月および令和3年4月、9月には樹勢（枝枯れの状態）を調査した。その結果、被害個体数（フラス排出が確認された個体の数）については令和2年度で881個体中48個体、令和3年度で874個体中45個体となった。両年度ともフラス排出が観察される時期が被害個体により異なったことから、被害木を発見するためには年に複数回、定期的に調査を実施する必要があることがわかった。また、フラス排出孔数については令和2年9月時点で73個、令和3年9月時点で25個となり減少した。この原因として、令和3年度は令和2年度と比較して管理者による幼虫駆除対策の強度が上がったことが影響している可能性が考えられた。樹勢については、クビアカツヤカミキリ被害木で極端に衰弱または枯死している個体はわずかであった。

2. 樹幹注入処理の効果検証

クビアカツヤカミキリの被害を受けているソメイヨシノ6個体を対象に樹幹注入処理を行い、樹幹注入処理日（令和3年6月下旬）から調査終了日（令和3年8月下旬）までの期間、フラス排出孔数を1～2週間に1回記録し、幼虫の防除効果を調査した。その結果、処理後1週間経過時点からフラス排出孔数が減少し始め、処理後2週間経過時点から調査終了日までの期間、フラス排出孔数は処理日の2割から4割程度の低い値で推移した。令和2年度の調査結果から、樹幹注入未処理の場合、6月から9月までの期間に被害木のフラス排出孔数が増加していったことから、今回の樹幹注入処理により幼虫によるフラス排出が抑制されていると考えられた。

3. 成虫脱出防止の効果検証

クビアカツヤカミキリの被害を受けているソメイヨシノを対象に、成虫脱出予定孔（以下、予定孔と記載）の樹脂被覆による成虫脱出防止を検討した。予定孔30個をシリコン樹脂で被覆した結果、27個の予定孔では脱出の痕跡がみられず、そのうち4個の予定孔では内部で死亡した成虫を確認した。一方、2個の予定孔では成虫脱出の痕跡を確認し、1個の予定孔では脱出途中の成虫を確認した。このことから、脱出予定孔をシリコン樹脂で被覆することで成虫の脱出を防止できる可能性が示されたが、被覆が薄いと成虫が脱出することがわかった。